

令和6年度 第1回子どもにやさしいまちづくり推進会議（要約表記）

【日 時】 令和6年7月3日（水）14:00～16:00

【場 所】 豊田市役所 南51会議室

【出席者】

（会場出席委員）※委員名は五十音順

安藤 順（市民公募委員）

池北 真一（トヨタ自動車株式会社 人事部労政室制度グループ グループ長）

大橋 一之（連合愛知豊田地域協議会 代表）

岡田 朋（愛知県豊田警察署 生活安全課長代理）

小栗 保宏（豊田商工会議所 参与）

梶川 宏樹（愛知県足助警察署 生活安全課長）

釘宮 順子（NPO団体 フリースペースK 代表）

窪田 裕巳（豊田市私立こども園（豊田東丘幼稚園） 園長）

酒井 恵子（豊田市母子保健推進員の会 会長）

鈴木 雅弥（豊田市青少年健全育成推進協議会 会長）

竹川 和人（豊田市私立幼稚園協会 市推進委員）

永田 康男（豊田市区長会 理事）

中屋 浩二（児童養護施設梅ヶ丘学園 施設長）

野口 眞弓（日本赤十字豊田看護大学 教授）

馬場 爽右（豊田市子ども会議）

平井 美貴子（豊田市私立幼稚園保護者の会連合会 会長）

深谷 和義（椙山女学園大学 教授）

松永 聡（愛知県豊田加茂福祉相談センター センター長）

山田 博子（豊田市民生委員児童委員協議会 主任児童委員部会長）

山谷 奈津子（豊田市子どもの権利擁護委員 代表擁護委員）

吉永 真理（日本ユニセフCFCI委員会（昭和薬科大学） 副委員長）

萬屋 育子（NPO法人CAPNA（子どもの虐待防止ネットワーク・あいち） 理事）

（リモート出席委員）

高橋 昌久（一般社団法人 豊田加茂医師会 顧問）

達本 綾香（豊田市こども園保護者 代表）

平林 直也（豊田市PTA連絡協議会 会長）

深見 和久（豊田市子ども会育成連絡協議会 会長）

（事務局）

竹内 寧（こども・若者部長）

成瀬 文浩（こども・若者部 副部長）

宇佐美 由紀（こども・若者部 こども・若者政策課長）

宮川 貴行（こども・若者部 こども家庭課長）

畔柳 隆二（こども・若者部 保育課長）

岩月 一裕（教育部 教育政策課長）

岸本 勝史（教育部 学校教育課長）
近藤 宣広（青少年相談センター 所長）
矢藤 亜矢子（こども・若者部 こども・若者政策課副課長）
松本 一輝（こども・若者部 こども・若者政策課担当長）

【欠席者】

石川 虎南海（市民公募委員）
荻野 典子（豊田市小中学校長会 石畳小学校長）
佐々木 弥生（名古屋法務局豊田支局 総務課長）

1 開会

事務局

- ・令和6年度 第1回豊田市子どもにやさしいまちづくり推進会議を開会する。
- ・令和6年3月に会議を開催して以降、新たな委員に御就任された方を紹介する。新しく委員になられた方の委嘱状は机上配布している。任期は令和7年7月28日までである。
- ・本日、委員29名中26名が出席、3名が御都合により欠席されているが、豊田市子ども規則第19条第2項に規定する委員の半数以上の出席を満たしており、本会議が成立していることを報告させていただく。
- ・本日は、傍聴の方が6名いらっしゃる。また、会議録は市のホームページに掲載する。

2 部長あいさつ

部長

- ・本日の会議は協議事項1件、報告事項1件である。
- ・本日は主に、重点プロジェクトの内容など具体的な取組について御意見を頂きたい。

3 会長あいさつ

会長

- ・本日は昨年度行われたアンケート結果を踏まえて皆様と検討していきたい。

4 議事

（1）（仮称）豊田市こども・若者総合計画の策定について（協議）

【資料 1-1～1-4】

事務局

- ・これから議事に移らせていただく。議事の進行は野口会長にお願いしたい。

会長

- ・スムーズな議事の進行に御協力をお願いしたい。
- ・リモート参加の委員の方もいらっしゃるの、御発言の際には御自身のお名前を伝えてほしい。

事務局

- ・まず、資料 1-1～1-4 に基づき、（仮称）豊田市こども・若者総合計画の策定について説明させていただく。
（資料説明）

会長

- ・今の説明について、御意見・御質問はあるか。

- 委員
- ・様々な取組が行われており、豊田市は子育てしやすいまちになってきたのかと思ったが、資料 1-1 の 2 ページで、出産、子育てがしやすいまちとして満足している割合が、平成 28 年度と比べて令和 5 年度で下がっているのはなぜか。また、それを踏まえた今後の方向性として、「必要な人が必要なサービスにつながるための情報発信」となっているが、このような内容で良いのか。
 - ・児童養護施設にいるような、困難を抱えているこどもたちに対して、どういう対策や施策が必要なのか、というところも欲しいと思った。
- 事務局
- ・満足している割合が減少していることについては、この間にコロナ禍があり、子育て世代も大変苦しい時期だったことが原因の一つと考えられる。情報を収集する作業が大変なので、豊田市のこども施策が本当に必要な人に情報が渡っていないため、実は評価しにくいといった状況もある。豊田市に住んでいるときには気づかなかったが、他の自治体に転出して、初めて豊田市の支援について知ったという声もある。そのため、質問自体を再考して、評価軸を検討しなければと考えている。
 - ・困難を抱えるこどもたちへの対応は、権利について啓発することで、それなりの認識はされているが、こどもたちが本当にそれで幸せになっているのか、という疑問もある。支援団体と協力しながらネットワークをつくることによって、社会的に困難を抱えている子たちを早く発見して、公的な支援と市民団体の支援にもつなげていくといった形で、早期発見・早期対応と、その後の引き続きの対応を何とかしていきたいと考えており、居場所づくりとネットワーク化を重点プロジェクトに挙げている。
- 委員
- ・納得しきれないが、評価は必要だと思う。現状を把握し、ゴールをどうするのか、具体的な評価軸がないと、施策が上手くいったのかいかなかったのか判断できない。
- 会長
- ・ほかに御意見・御質問等はあるか。
- 委員
- ・資料 1-3、5 ページの、「学校以外の活動に参加しているこどもほど、自己肯定感が高い」というのは、そのとおりだと思う。多様な居場所づくりの推進について、サロンや交流館などの具体的な居場所以外にも、様々な活動に参加することで、学校だけでない多様な仲間の中で、こちらでは認めてもらえなくてもあちらでは認めてもらえる、そういう意味の多様な居場所というのも、こどもたちにたくさん持ってもらいたいと思う。そのために、こどもたちに様々な活動に参加してほしい。昨今、子ども会離れや PTA 離れで、市子連に加入する子ども会も少しずつ減ってきているが、反面、中学生ボランティアのジュニアリーダーは発足当時 10~20 人だったのが、最近は 100 人を超えている。そこから見ると、こどもたちは色々な活動に参加したいと思っているのだが、親の都合で小学生のうちは参加できない。親がこどもに付いていけないといけなから参加を踏みとどまっているのであり、中学生になって、ある程度自分の判断で動ける子たちは、どんどん参加したいと思っている。こどもの色々な居場所を増やしていくのと同時に、親がこどもを参加させやすい体制を作っていきたいと、結局はこういった議論も無駄になる。
- 事務局
- ・おっしゃるとおり、物理的な場所だけでなく、イベントなどの体験・参加の場も、こどもの居場所になる。子ども会議も年々委員が増えている。子育て世代

- が非常に忙しい中、こどもの参加に対して負担があると、こどもたちの参加の機会を妨げるので、そういったことも検討していきたいと思う。
- 事務局
- ・「なぜこの居場所にきたのか」と、こどもたちの意見を聴くと、「こっちの方が居心地いいから」と返答があった。体験を含めた色々な居場所があることで、自分に合った居場所を見つけられると良いと思う。
 - ・今年度、子ども会議でこどもたちの意見を聴き、本当に行きたいこどもの居場所について検討する。
- 会長
- ・本日は子ども会議委員も参加しているので、意見を聞いてみたいと思う。どんな居場所が欲しいですか。
- 委員
- ・自分が小学生のときは、総合野外センターでの活動等を広報とよたで見つけて、やってみたいことを探していた。今の小中学生には iPad が貸与されており、簡単に検索できるアイコンがあるので、それを使って身近な居場所を探し出してほしいと思う。
 - ・学校や家の中ではできない体験を、自分の足で行ける範囲に作ってほしい。
- 会長
- ・誰かイニシアティブを取って、活動してくれる人も必要、ということだ。そういったことを計画に盛り込んでいかないと、場所だけ作っても仕方がないということである。
- 委員
- ・居場所は高齢者にも必要なので、こどもとごちゃまぜの場所があちこちにあると良い。多様な大人に出会えると良いと思う。子ども会に入っている子たちは小さい子たちばかりで、大きい子がいない。役員になると大変だからとか事情があると思うが、そういった細った部分をどうするか。「誰かがいればできる」が、「いなくてもできる」ような形になると良い。
- 委員
- ・コロナ禍以前は、地域の独居の高齢者と小学生が交流するイベントや、中学校のボランティアでは、交流館でお祭りを開催して、地域の人と交流することがあった。コロナ禍に入って、なくなったり復活していなかったりするものがあるので、そうしたところもまた考えてほしい。
- 委員
- ・当園も敷地内に畑と果樹園を作り、高齢者に来ていただいて、施設のこどもたちと交流を深めてもらっている。ただ、こどもたちは高齢者と交流したいわけではない。色々な作業をしながら、自分たちにはないノウハウを指導していただいて、収穫した野菜を学園が買い取って、それを賃金として、作業してもらったこどもたちに手当する、というやり方をしている。こどもたちは高齢者に関わる理由ができる。思いのほか、高齢者が優しく指導してくれ、自分たちの知らないことを色々教えてくれる恩恵を受けることで、尊敬の念が出てくる。高齢者も、こどもたちが素直に喜んでくれるのを、微笑ましく見ている。そういうマッチングのあり方は、場をつくるだけでなく、どういう狙いを持って、上手に交流できるようにするのか、という視点も必要である。
- 委員
- ・小児科医療で問題になっているのは、こどもの身体的な健康は 38 か国中 1 位だったのに対し、こどもの心理的健康度は 37 位であり、こどもの自殺者がとても多い国となっていることである。
 - ・今、こどもの居場所として考えられているのは、現実には会う場所だと思うが、デバイスが色々配られているので、デジタル空間の中で居場所をつくるというのは、まだ早すぎるだろうか。

- 委員
- ・学校で配られている iPad の性能が良くないし、監視も強く、学校でやると居場所をつくるというより、学校から見られているという印象を受ける子がいると思う。小さい子は親のスマートフォンやパソコンを借りることになるので、自らの手で参加するのは難しいと思う。
- 事務局
- ・今年 6 月に若者サポートステーションからリニューアルした豊田市こども・若者総合相談センター Reppo では、今まで対象を 15 歳以上としていたが、小学生からに変わった。ウェブや仮想空間（マイクラフト）上でこどもたちが交流をする形を取っている。
- 事務局
- ・教育委員会としてもデジタル空間の中が不登校の子たちの居場所としてなり得るのか、実証実験をしているところである。
- 会長
- ・現状としては、不登校の子たちには仮想空間が提供されるが、不登校ではない子たちには、まだシステムの難しいといったところだろう。
- 委員
- ・資料 1-3、こどもの権利プロジェクトの取組の方向性、「こどもの意見を市政に取り入れる」の 3 行目にある「一部の地域」とは、どこの地域か。
- 事務局
- ・旭地区である。中学生が提案してそれを地域会議に反映している。他の地域でも取り入れてほしい。
- 委員
- ・資料 1-2、母子手帳に子どもの権利条約の 4 つの原則を掲載して周知するというのは良かったと思う。さらに、虐待の始まりは体罰なので、体罰禁止を早くから親に教えてほしい。母子手帳を交付するときや、その後のパパママ教室でも伝えてほしいと思う。
- 事務局
- ・好んで子を虐待する親はおらず、虐待に至ってしまうストレスやイライラの原因を解消しないといけなため、啓発と子育て支援とを合わせて、子育てが楽に、楽しくできるような方法を考えていきたいと思う。
- 委員
- ・交流館もサロンがなくなり、誰がそれを見るのか、次年度からどうするのか、困っている。見守る人がいない。こどもまんなかと言っても、自分の意見を発言できる子は良いが、生まれたての赤ん坊など、自分で意思表示ができない子はどうしたら良いのか。親子の絆、家族の絆の原点をしっかりと捉えながら、プロジェクトに臨んでほしい。高齢者や地域の皆で見守るのも、居場所も良いことだが、根本的な親子・家族の絆も匂わせてほしい。
- 事務局
- ・そういった考え方は根本的にあり、子ども条例はその立場になっている。こどもまんなかと、子育てする親が笑顔になるような、そういったところを熱く語れるような計画にしていきたい。
- 事務局
- ・資料 1-1、4 ページ 1 番下のこどもたちの意見に、「子どもも大人も楽しいまち」とあり、こどもが企画したイベントでは、「大人が楽しそうにしてくれたのが嬉しかった」という感想が多くあった。こどもたちはこどものことだけでなく、大人や保護者のことも考えている。そういったところから、今回、重点プロジェクトでは、こどもだけでなく保護者や子育てについても設定している。
- 委員
- ・自分の地区では小中学校の不登校の子が多いことを知った。中学生の不登校の子が、その先どうなるのか心配である。意見を言えずに家でゲームをしている子、他人の目が怖いような子たちが、これから先、大きくなっていけるのか、自分で生活していけるのか、とても心配している。
- 事務局
- ・コロナ禍を挟んで、全国的な傾向と同じように、豊田市でも不登校の子が倍増

しており、そういったことに対する危機感を持っている。青少年相談センターでも、不登校の子に居場所をみつけるプランで、誰一人取り残さないような形で、一人一人が様々な居場所を見つけて、将来的に社会的な自立につながっていけるように、支援に取り組んでいる。

事務局

- ・不登校や引きこもりの子の対応をしているのが、豊田市こども・若者総合センターRePPOである。従来は対面式で対応をしていたので、保護者から相談が入ってきて、徐々に本人にアプローチしていく形を取っていたが、ウェブ等を利用し、本人とダイレクトにつながるようなアプローチを始めている。結果、一昨年度は200人弱くらいの相談があったが、昨年度は240人くらいに増えている。こどもにはそれぞれの悩みや課題があり、色々なパターンがあるので、その子に合った、伴走する形での支援を目指している。その子の状態に合わせて、何をゴールにするのか、もう一度学校に戻るのか、就職するのか、誰かとつながりたいのか、目標を決めながらその子に合った対応をしている。

事務局

- ・教育委員会やこども・若者部が対応できることもあるが、行政だけでずっと支援し続けられるわけではないので、地域の中でその子が安心して話せる家族以外の大人が増えていくことが大事だと思う。そうしたことから、居場所づくり、こどもと大人が繋がるような取組が大事だと考えている。先日、UNIBOという民間企業が運営している事業所へ行った。そこではマイクラフトや色々な通信ゲームができて、学校に行けない子の受け入れをしている。こどもたちは、最初はゲームが楽しそうだと思って来るのだが、そこにいる人に会っているうちに、その人と喋りに来るようになり、そこが居場所になる子もいる。中には、学校に戻っていける子もいるそうだ。様々な行政の制度や民間の支援ができることを組み合わせて、何をやっていけるのか、考えていきたい。

委員

- ・資料1-1の、「大人が楽しそうにしていって嬉しかった」というこどもの意見に同意する。市子連では毎年夏に水鉄砲バトルというイベントを行うが、親子対決が一番盛り上がる。自分の親と遊んでもらいたいという気持ちをすごく感じる。市子連への加入を辞める地区に理由を聞いたところ、「役員をやりたいくないという親ばかりなので、もうやれなくなった」とのことだった。結局、一生懸命こどもにやさしいまちづくりを考えても、親の意識をもっと上げていかないと、つながっていかないのだな、と感じる。子育て世代は次から次へと新しい親に変わる。その新しい親の意識を上げていかないと、こどもには色々なものが届かない。親の意識を変えていく必要がある。

委員

- ・青推協ではスローガン「話してつなごう家族のわ(輪)」を大事にしている。理事たちが各地区で支援活動をしており、イベント等でゲームを楽しんだ親子が、家に帰って「楽しかったね」と話せるようにしている。そういった、つながれる人を増やす機会が大事なので、そこを市で確保しているのは素晴らしいと思う。
- ・普段は他の地区の特別支援学校に通っている子が、地元の小学校の運動会に参加しているのは、とても良いことだと思った。そういう例を紹介してあげると、選べる要素の一つになるかもしれない。
- ・自分が住んでいる地域では、使わなくなった小学校のグラウンドを、地元の人たちが協力して、公園づくりを始めている。そこを使って、こどもたちにステ

ージで演奏してもらったり、大人も一緒に参加したりしている。そうした地域づくりを始めている団体も各地区にある。

- ・デジタル空間も含め、自分で居場所を選べる、こどもも親も選べるというのは、すごいな、と思った。

会長

- ・そういう活動を推進する人たちをたくさんつくっていくのも、結構大変ではないか。

委員

- ・青少年部会の活動は市の青推協がつかないでいて、各地区に責任を持ってやってくれる理事がいる。

- ・公園づくりについては、最初は地元メンバーの10人くらいで立ち上げたが、ボランティア会やトヨタ工業学園の学生が、100～150人単位で地域づくりを助けてくれるので、協力いただきながら進めている。子ども会やこどもたちの親にお願いするのは負担が大きいと思う。やってほしいことはたくさんあるが、やってくれる人を探すのは難しい。地域でこどもを支える人を探すのは大変である。今あるところを整理しながら、支援したり、つなげていったりできればと思う。具体的に動けば、そこから広がっていくことが多いと感じている。

委員

- ・不登校になって親が心配するのは、引きこもりになったらどうしようということだ。引きこもりの人に話を聞くと、自分を責め続けている。じっとしているから暇なのではなく、心の中がものすごく忙しく、何年籠っていても一瞬だと言っている。不登校や引きこもりが悪いのではない、それも人生の中の一つだ。他と比較するから大変なのであり、その子を認めれば色々な生き方があり、その子が何かしようと思ったとき、そこから物事は動いていく。人は分かり合えないことを基本にしながら、対話を重ねていく必要があると思う。やっている人が楽しそうにしていれば、人はついてくると思う。

委員

- ・心の健康に関わる指標が低いという話だが、その中身は、自分を好きか、自分に満足しているか、すぐに友達を作れるか、の質問項目について、日本のこどものスコアが低かった。そういったことを全体として自己肯定感と呼んでおり、居場所や意見表明の経験、及びそれが反映されたことがあると、自己肯定感が上がると言われていて、日本ではそれが必要となっている。今回重点プロジェクトの中にそれらが入っているのは素晴らしい。

- ・資料 1-3 の2ページ、「共働」の字について、日頃、他の自治体で見ているのは「協働」がほとんどである。今回初めてこの字を見たが、いかにも一緒に、それぞれ頑張っているという感じが出ていて良いと思った。市民が一緒にないと絶対にやれないことがほとんどなので、市民の力がとても大事で、色々な人が関わって、こどもや若者が、今自分の周りにいる親や学校の先生以外にも、こんなに面白い色々な大人がいるんだ、という実体験を持てると良い。先程こどもに応じたゴールがあり、ゴールが一つではないことを、こどもに伝える話をされていたが、そのとおりのことが、色々な人が関われば関わるほど、多様な人がいるというのがこどもに伝わっていくと思う。そういうことを通して、自己肯定感が上がっていく。不登校も、そういうことを通して、長くかかったとしても減っていくと思う。そういう人たちに対して、計画の中に書き込むことが必要だと思うので、ぜひ担い手育成、人材育成についても書き込んでほしい。

- ・意見を言うためには、意見を持たなければならない。意見形成がとても大事である。こども家庭庁のガイドラインにも入っていると思うので、74 人のこども委員の皆で、ぜひ意見を持つところから、やっていけたらいいと思う。
 - ・子育て支援の ICT のところは、行政のシステムの話が中心だったが、事業者の管理職の ICT 対応が非常に遅れていると感じることがある。妊娠中でつわりがひどいときに、リモート勤務をしたくても対面会議に出てこいと言われるような話をよく聞く。行政のシステムづくりを進めながら、事業者の意識改革をできるようなプランが入ってくると良い。
- 委員
- ・こどもと子育てを皆で支えるには、大人の働き方が変わっていかないといけない。豊田にはとても面白い力を持った大人がたくさんいる。色々な人たちと関わることでこどもたちが変わっていくと思うと、その大人たちがそこに参加できる時間がないのが問題である。こどもだけでなく、大人の心身的な問題もあると思う。働き方改革について、企業を動かすのは難しいと思うが、できるのは行政なので、計画の中にそういったところも少し増やしてほしい。資料 1-5 のアンケートでも、大人も働き方について、実際の働き方と、仕事や家事・プライベートのバランスで、希望と現実の大きな差を感じている。そこを強く出していくのが大事だと思う。
- 会長
- ・資料 1-4 の 5 ページ、「不妊治療費の助成」は大変ありがたいが、それ以前に、妊娠する前のケア（プレコンセプションケア）をもっと一般の方々に教える必要があるのでは、そこに関して推進してほしい。

（２）令和５年度豊田市のいじめの現状と防止等に関する取組について（報告）

【資料２】

- 事務局
- ・資料 2 に基づき、令和 5 年度豊田市のいじめの現状と防止等に関する取組について説明させていただく。
- （資料説明）
- 会長
- ・今の説明について、御意見・御質問はあるか。
- 委員
- ・こどもからこどもだけでなく、大人や教員からこどもへの心理的圧迫が世界中で言われており、日本版 DBS 制度もできたが、豊田市ではどこかの部署で対応を考えているか。
- 事務局
- ・検討中である。
- 委員
- ・令和 4 年度の小中学校共に年度末収束率が低い理由が知りたい。
 - ・中学校では校長判断で加害生徒は出席停止にして、被害者を守る方法もあると思うので、被害者だけが不利になることがない対策方法について知りたい。
- 事務局
- ・収束率は、3 か月くらい見守って、被害を受けたお子さんが継続して安心して過ごせた状況が、およそ見られると、収束したとみなしている。令和 4 年度は特に丁寧に見ていこうということがあり、統計のときに収束したと言えないことが多かった。令和 5 年度には、丁寧な対応をして収束に向けた対応をするよう通知を出したところ、学校の方でも取り組んでいただけたようで、前年度の数値に戻ってきた。
 - ・法的には、校長が懲戒処分として加害者を出席停止にすることはできるが、やはり学校では、被害に遭う子も、加害をする子も、実は何らかの課題を抱えて

いることが多いため、いけないことだと指導するのは大切だが、加害のお子さんの背景も丁寧に見ながら、その子のケアも必要だと考えている。そういった全体的な状況を踏まえ、健全な育成につながっていく対応をするというのが、豊田市の考え方である。

- 委員 ・ここには出ていないが、各学校に地域学校共働本部があり、色々な人たちがボランティアに入って、違った目で子どもたちを見ていると思うので、そういう人たちの声を聴くと良い。学校に風を入れるのが大事だと思う。
- 事務局 ・地域学校共働本部は、地域の大人の方々が、各学校でこどもの見守りや授業のサポートなど、様々な場面で学校を支える活動をしてくださっている。声を聴く機会は各学校で持っており、教育委員会もきちんと耳を傾けている。また違う方に話を聞くことも検討していきたい。

5 その他

- 委員 ・8月22日に、こどもの健康について考える「君はなぜ苦しいのか」という講演が開催される。少子化の中、こどもの自殺が増えているので、参加いただければと思う。
- 委員 ・昨年11月の子どもの権利条約フォーラムの報告書が完成した。例年2日間で延べ1,000人くらいだが、今回は2,000人の方が全国から集まった。
- 会長 ・ほかに御意見・御質問等がないようなので、以上で全ての議事を終了する。

6 閉会

- 事務局 ・今年度は今日の会議を含め、2回を予定している。次回の会議について、第2回目は9月30日（月）午後2時からを予定している。会場は本日と同じ、南51会議室になる。
- ・パブリックコメントを7月19日から行う予定。委員の皆さんには計画の素案を送らせていただくので、御確認いただきたい。
- ・以上をもって子どもにやさしいまちづくり推進会議を終了する。